

## 親子向けフィールドセミナー「地球教室」: その4 河原の石でつくる石包丁

## Earth School: Field Seminar for Parents and Children; 4. Stone Hunting

# 吉田 英一 [1]; 桂田 祐介 [1]; 東田 和弘 [2]; 亀高 正男 [3]; 西本 昌司 [4]; 中村 壽男 [4]; 足立 守 [5]; 毛利 勝廣 [4]

# Hidekazu Yoshida[1]; Yusuke Katsurada[1]; Kazuhiro Tsukada[2]; Masao Kametaka[3]; Shoji Nishimoto[4]; Hisao Nakamura[4]; Mamoru Adachi[5]; Katsuhiko Mouri[4]

[1] 名大博物館; [2] 名大・博物館; [3] 名古屋大学博物館; [4] 名古屋市科学館; [5] 名大・博物館

[1] NUM; [2] Nagoya Univ. Museum; [3] Nagoya Univ. Museum; [4] Nagoya City Science Museum; [5] Nagoya University, University Museum

名古屋大学博物館と名古屋市科学館は、親子向けのフィールドセミナー「地球教室」を連携して行っている。この事業は、科学技術振興機構の研究者情報発信活動推進モデル事業の一環として行われており、大学と地域博物館の連携の実験例としても注目される。2006年度には一般向け8回、科学館関係者向け1回の計9回のイベントを実施した。宿泊付きのイベントを除くと、1回のイベントでは室内での学習会を1日、日帰りの現地学習会を1日の、2日間セットで行っている。ここでは「第6回地球教室 河原の石でつくる石包丁」(以下、地球教室(石包丁作り))の概要を報告し、今後の課題などを述べたい。

当イベントの内容は、礫を研磨して石包丁を作製し、実際に肉や野菜を切断し料理を作るというものである。その目的は、河原の礫にはいろいろな種類がありそれぞれ性質が異なることを理解し、石を加工し道具を作り使用するという体験を各自が行うことにある。このイベントは礫さえあれば場所を選ばないので、全国どこでも実施が可能である。

地球教室(石包丁作り)は、11月3日(金・祝)・4日(土)の2日間の日程とし、初日(3日)午前は木曽川河岸で野外学習(礫の採集)を行い、その後名古屋大学博物館に戻り室内学習を行った。2日目(4日)は名古屋大学博物館セミナーハウスで石包丁の作製実習を行った。募集定員は30名とし、親子での参加を推奨したが、中学生以上は保護者なしの参加も認めた。応募者は69名(23家族・組)で、抽選を行い当選者に案内を送付したが、その後若干のキャンセルがあり参加者は24名(9家族・組)となった。応募の段階から男子児童と母親という組み合わせが多かったのが今回の特徴である。また、地球教室(石包丁作り)は、第2回名古屋大学博物館国際フォーラム「次世代教育と国際連携」と連動して行っており、海外の博物館関係者6名も参加した。

初日はまず名古屋から岐阜県各務ヶ原市鵜沼の木曽川河岸に行き、石包丁作製の礫の採集をしてもらった。この時点では、どの岩石が石包丁に適しているかは教えていない。対岸の公園で昼食を取った後、名古屋大学博物館に戻り、採集した礫を使いつつ、岩石についてのお話をもとに岩石学の基礎を学習した。最後に、実際の河原の石を使った岩石鑑定クイズを行い理解度を増進させた。

2日目は、初日に採取した礫を使い石包丁作製を行った。礫の研磨には鉄板と研磨材(#100)を使い、仕上げに砥石を用いた。鵜沼で採集できる礫には、砂岩、泥岩、チャート、流紋岩、安山岩、花崗岩などがある。このうち最も石包丁作製に適しているのは泥岩(頁岩)である。火山岩や花崗岩、砂岩は結晶が外れて刃こぼれしてしまう。また、チャートは堅すぎて研磨には不適である。作製後には、肉や野菜を実際に切断し、切れ味を確かめてもらった。切断後の肉はカレーに入れ、これを昼食として食した後イベントは終了である。どの礫が石包丁に適しているかを、実習を通して参加者は実感できたと考えられる。このイベントでは、石包丁作製と同時進行で昼食の準備(炊飯とカレーの下準備)を進めねばならない。そこで、昼食準備専任のスタッフを配置して対応している。

イベント実施後のアンケートでは、概ね好評で「とても楽しかった(17名)」、「楽しかった(4名)」との解答からエンターテインメント性が高かったことが伺える。「同じ内容でもまたやってみたい(19名)」、「親子や家族で楽しめるのが良い(17名)」などの項目にチェックをする人が多かった。一方で「もっと科学的に」と解答した人が4人おり、これは各回通してもっとも多い人数である。このイベントのエンターテインメント性を損なわずに、いかに科学的要素を加えていけるかが今後の課題といえる。また、国際フォーラム参加の海外博物館関係者からは「最初の礫の採取では、なるべく多くの種類の礫を採集するようにさせるべきだ」、「対象年齢を絞った方がよい」などの意見が寄せられた。後者については、地球教室全体の方向性に関わる重要な検討課題と言える。